



Title	「おかわりクラブ」の実験から : 職業選択から自己実現への道筋
Author(s)	堀, 一人
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1997, 1, p. 82-86
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81715
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「おかわりクラブ」の実験から——職業選択から自己実現への道筋

堀 一人

現在、高校を卒業した人の30%が就職します。そして、それらの人の就職後三年間の離職率が50%を越えています。もう一つは、学校で斡旋して職安を通して就職するということをしない生徒が非常に増えています。適当にアルバイトをするからという生徒が非常に増えている。そういう訳で、実際に高校での職業・進路指導ということが問題になっているわけです。そこで、以前、A'ワーク創造館という職業教育を扱う大阪府庁の外郭団体と教育委員会が協力して、「中退君ホットライン」というのをやりました。今から五年前に、中退者に対して呼びかけて電話をかけてきてもらったとき、「もう一回学校行きたいのだけれどもどうしようか」などの相談を受けました。その時の標語が「人生おかわりできます」でした。それで昨年、じゃあ、就職した後のフォローの問題、就職したけれども今、悩んでいるとか、就職指導をどういうふうを受けてきて、今、会社に入っているけれども、どんな状態か知るために講座をやってみて、そこから高校での進路指導に活かせる部分はないだろうかということを考えようということで、「おかわりクラブ」という取り組みをやり始めました。去年は一年に九回の講座、定員二十名でやりました。

このように、高校中退の増加や高卒就職者の離職率の高さなどが、この「おかわりクラブ」が生まれた経過です。「若年層の就職観の変化」ということでは、若年層と呼ばれる15才から24才層には、最初に就職した所が天職で、そこで一生働くのだという意識がないのではないかと最近言われています。大学生への調査では、定職を持つ時期がいつであるべきかという質問に、大学を出てすぐだという人は55.6%です。結婚するまでにだという人が31%です。そして92年時点で、15才から24才層で男子の離職率は17.7%で、女子は19%ということで、年間の離職率ですからかなり高い値であり、転職へのアレルギーは少ないということが一つ言えます。またもう一つに、どうい

うことを思って就職するか、仕事に何を求めるかということなのですが、何のために仕事をするかということがやはり変わってきたのではないのでしょうか。僕は、現場で高校生に就職させる時に、「石の上にも三年」、三年は我慢しろ、そうすれば失業手当などの条件も良くなるし、最初あかんと思っても三年我慢すれば楽しくなるかもしれないので我慢しろと、そういう古い道徳観のようなものを押しつけて指導しているのですが、実際は、仕事に対してひたむきに、仕事をいったん選んだらそれをきっちりするのだという努力を肯定するというような感じではなくなってきました。じゃあ、お金や物質的な報酬が目的だという時期もあったと思うのですが、今はそれだけということでもないようです。

去年の「おかわりクラブ」での基本の考え方は、これは、各々自分が自分の仕事を、自分へ向かって問い直すことによって自分を見つける講座だということとして、こちらからは、今の一般的な状況なんかは言うし、例えば、「こんな職業についてどう思うか」とか、質問されたら答える。しかし、こちらからは一切、「こういうふうにしなさい」とか「転職したほうがいいよ」とか、「こんな企業はどうか」とかいうことは絶対言わない。あくまでも自分で考えさせて、疑問が出てきたらそれには答えようという。そういうことでやりました。自分で自分を問い直す最初のきっかけとして、この「おかわりクラブ」で一番最初、自己紹介の時に使ったのは次のような手法です。過去・現在・未来の三つのカードを用意して、過去のカードの表に今まで就いてきた職業を全部書いてもらい、現在のカードには、今、何をやっている時が一番楽しいか書いてもらい、未来のカードには、今の現実とは一旦離れた形で、どんな仕事でもいいから興味のある仕事、自分がもう一度一から就職できるなら、就きたいと思う仕事を書いてもらいました。その結果を見ると、明らかに一つの傾向がありまして、皆に共通するのは、自分が負担を感じないで楽しんで仕事をしたいということと、もう一つは、その結果、誰か人が喜んでくれるような人のためになるような仕事をしたいということでした。何か物質的な報酬よりも、確かに自分の自負心を満足させ、自分の人生が意義があると思えるような職業を望んでいる、——一般的にはそういう傾向になってきているようです。だから労働の目標が、極端な「物質的欲求」よりも「精神的な欲求」にシフトしてきてい

るというのは明らかなのではないのでしょうか。

そういう状況を踏まえて、実際、去年「おかわりクラブ」をやり始めたのです。参加者は、明らかに三つの層に分かれました。一つの層は24～28才で、一般的に言う学歴もあるエリート。二つ目の層は、24、5才の女の子達で、短大を出て就職したけれど重要な仕事に就けず、やりがいがない、といったOLの人達。三つ目の層は、——この人達はしんどい子達で——ある代表的な子を挙げると23才くらいの女の子で、中卒で定時制高校に行ったが、学校を辞めて就職した。しかし、中卒の資格で就職する訳だから、あまり高度な仕事につけず、退職と再就職の繰り返しをしている人がいました。

私達がやった方法は、あくまで書かせることです。受講者に上述の三つのカードを書かせました。過去のカードの裏には、何故その仕事を辞めたのかを、辞めた時の気持ち、その仕事をしていた時の気持ちはどうだったか（その仕事をまだ続けている人は今どういう風に感じたか）を全部書くことを宿題にして、次の日机の上に並べてグループを作って読み合う。すると、自分の中にこだわりのようなものが見えてくる。程度の差はあるが、共通した要素が見えてくる。次には「仕事振り返りシート」というものを作って、今就いている仕事をどういうきっかけで選んだのかということを書いてもらいました。そして何が課題なのかということグループで討論させました。

そういう中で、自分にとって、自分がどこで躓いているのか、仕事を決める時にこんな風に決めたのはやはりおかしかったのだとかいうことに気付いてゆく。その間にいろいろゲストを呼んで、——ゲストの共通点は自分の意志で転職を決めて、自分で選んで今の仕事をやっているという普通の方々ですが——話を聞く。その話も、ゲストから自分のことを話してもらうのではなく、問題があるのは受講者の方だから、受講者が自分の問題を、「こんなことはどうか。」と聞いた時だけに答えて下さい、ということで、自分を考えさせるということをやりました。そして、6回目にコーディネーター（私も含めて3人）の中から自分が相談したい人を自分で選んで相談に行くという時間を設けて、あくまでも自分はどこで躓いていて、何が課題なのかということを見えさせる、そして自分からアクションを起こさせるということをしました。そして、最後の回には「仕事計画書」といってこれからの自分の設計をさせ、プレゼンター

ションをしてもらいました。

結局、各々が、自分の人生を自分で選択して自分で生きることがやっ
と分かるということになりました。「おかわりクラブ」から見えてきたことは、
高校3年生どころか高校を出ても自分の人生を、自分の就職も含めて自分の仕
事なり生き方を、自分で選択して決めてない場合が非常に多いということです。
そういう一人一人に付き合っ、一人一人の書いたこと、言ったことを毎回分
析して、次の課題を考えました。この講座は、受講生達にとってまさにイニ
シエーションの講座のようなものでした。そういうことを僕ら、生徒一人一人
に沿って——その子が自分の言葉、自分の頭で考えて、自分をどうしていこう
かということをそれぞれのスピードで考えると思うのですが——それに付き合
うということが教育の場面でほとんどできていない。これが高校教育の一つの
課題であるわけですが、親は余りに近いから逆にしんどいと思います。だから
何かそれに付き合っていく機関があればよいのですが、それが今の教育ではで
きなくなっている現状があります。我々コーディネーターは、ただ、横で聞いて
いて、「それでどう思ったの」とか言うだけなのですが、「こんなに話が出
来て、話を聞いてもらったのは初めてだ。」という受講者が何人もいて、本人
達は自分のことを出してそれだけ受け止めてくれたと思っていました。受講者
は自分の生き甲斐となる職業を求めたいという気持ちが一方でありながら、
そこへ行く道筋は分からないでいる。あるいは自分で一歩踏み出すことがなか
なかできない。生き甲斐というものは、自分で決めなければならないのに、そ
れを求める姿勢は非常に他律的になっていて、自分の生き甲斐やできそうな仕
事の範囲や内容、方法を誰かが提示してくれるのを待っているという姿勢を非
常に感じました。それを徹底的にほぐして自分でそれを見つけて、自分でやら
なければならないのだよということを、ずっと言い続けました。ついつい僕達
教師は、逆に、「こういや」とか「こうせなあかんで」と言ってしまうので
すが、それを抑えるのは非常に辛かったです。サジェスションの仕方が問題な
のですが、その人にとっての結論を言ってしまったらいけないのです。そして
今は、転職の情報も山程あるのですが、それが自分にとって持つ意味、自分に
とって必要な情報が分からないでいるのです。情報はいつでも手に入れるのだ
が、そこから一歩踏み出すということが重要であり、それにどうやって付き合

うかということが一番の課題なのです。

そして、最近の高校生の状況ですが、その特徴として「私生活中心主義」、「消費中心主義」、「偏差値・マニュアル主義」、「無気力・感覚的な反応」（「むかつく・うっとうしい」の多用）等が挙げられます。このような状況の中で、仕事（生産）でなく自分のこと（私生活）ばかり考えており、社会の中で自分が何をなすべきなのかという発想は持たず、モラトリアムの発想の方が強いのです。そして「生産」を否定的に受け取り「生産者」として疎外感を「消費者」として埋めています。消費が自己表現の方法になっており、自分に何ができるかではなく、相手が自分に何をしてくれるかというような「消費に馴らされた思考」（お客さんの思考）が蔓延しているのです。しかし、このような状況がある一方で、高校生達は、基本的な所で何か「精神的欲求」を求め始めています。そこで、世の中にはどういう仕事があって、自分は何をしている時が一番楽しいのかといった内面までも掘り下げる作業が必要になりますが、それにじっくり一人一人に付き合い見つめる時間が高校教育ではなく、それが大きなジレンマになっています。こういう状況の中で一体どうしていったらいいかということとを「哲学」の課題として、考える必要があると思います。

（記録：河村厚）